

保健師 最前線

海外で働いて、日本の良さ再確認

八幡市

おおの りこ
大野 典子さん

3年前。国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊に応募し、市役所を休職という形でネパールに赴任した。「おこがましいのですが、保健師を含めいろんな職種を経験しましたので、その経験を開発途上国で少しでも役立てたいと思い応募したんです」保健師になるまで「まわり道コース」を歩んできたという。国立大の経済学部を卒

業後、民間会社や社会福祉協議会に勤め、その間に二つの専門学校を卒業、看護師さらに保健師・助産師の資格をとり、8年前に八幡市の保健師となった。「病院よりも地域という場所で、息の長い健康づくりに携わりたいと思ったんです」。健康推進課で、母子・成人保健を通し乳幼児から高齢者まですべての段階に応じた健康づくりに取り組んできた。

ネパールでは保養地で有名なポカラ市役所に配属され、現地の看護師さんと母子巡回診療にあたった。妊婦さんへの保健指導や乳幼児の体重測定が主な仕事だった。「医療機器などが不十分で停電の日も多く、医療状況は戦後の日本といった感じです。ただ国の制度が未整備なぶん、地域の人みんなで子どもたちを守るという地域力のすごさには驚きました」

2年の任期を終え職場に復帰した時戸惑いを覚えたという。「きれいな服をきたお母さんが『子どもがご飯を食べてくれないんです』と、子育てに一人で悩み、相談に来られる姿を見ると、ついネパールと比較し一体何が幸せなのかあと考えさせられました」

昨春、子育て支援課家庭児童相談室に異動となった。主な業務は児童虐待

への対応だ。市は課長補佐と大野さんの正職員の保健師2人を配置し、嘱託を含めた計6人態勢により相談室の充実を図った。「目に見えない心理的虐待が増えており、子どもへの声掛けなど地道な努力を普段から積み重ねていく覚悟が必要だと思っています」。言葉に熱がこもる。

合唱と読書が趣味で、年末には合唱イベント「サントリー一万人の第九」に参加した。「帰国後、日本の良さを再確認することが多いです。ネパールでは娯楽が少なく、日本語の本を読むのは本当に楽しい時間でした。今ではすっかり読書好きです」。

JICAでの経験が仕事や趣味に大きな花を咲かせそうだ。

